



| | |
|--------------|---|
| Title | 内・外集団における異なる価値観の保持者に対する心理的距離と印象評価の連関 |
| Author(s) | 武藤, 麻美; 釘原, 直樹 |
| Citation | 対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 173-181 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/8656 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内・外集団における異なる価値観の保持者に対する 心理的距離と印象評価の連関

武藤麻美(大阪大学大学院人間科学研究科)

釘原直樹(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、(1)異なる価値観を有する内・外集団ターゲットへの心理的距離の延伸と、印象評価の切り下げとが連関するか否かについての検証、(2)その連関は、認知者が保有するターゲットに対する期待値と、現実値との乖離が大きい場合に、顕著に出現することの検証、を目的とした。実験デザインは、2(戦争反対意見, 戦争賛成意見) × 2(内集団: 日本人, 外集団: 米国人)の参加者間計画とした。結果は次のとおりである。(1)戦争反対条件で、ターゲットに対する距離の短縮化と印象評価の上昇がみられた、(2)戦争賛成反対の両条件とも、外集団ターゲットよりも内集団ターゲットで、距離の延伸と印象評価の低下がみられた、(3)心理的距離と印象評価の変動は類似の傾向を示した。これらの結果について考察を行う。

キーワード: 心理的距離、印象評価、現実値、期待値、内・外集団

問題

本研究は、自身とは異なる価値観を有する内・外集団ターゲットへの、心理的距離の延伸と印象評価の切り下げとが、連関した動きを示すか否かを検証することを第一の目的とする。またその連関は、認知者が元来保有するターゲットに対する態度の期待値と、ターゲットが現実に保持している態度の現実値との乖離が大きい場合に、顕著に出現することの検証を第二の目的とする。

グローバル化が進む昨今、異文化を背景にもつ他者との関わりが増加傾向にある。少子高齢化・労働人口減少問題を抱える日本では、将来、海外からの労働者の流入が増大する可能性がある。また、メディアの発達も伴い、多文化ないし多様な価値観が共存する社会へと、変遷していくことが考えられる。そして、精神障害者地域移行・地域定着支援事業や更生保護制度など、地域でのケアに重点を置いた支援が、我が国の社会福祉領域では、今後ますます活発化すると考えられる(内閣府, 2011)。だが、こうした方向に行政が舵をきっても、実際は、社会的背景を異にする人々に対する、地域住民の心のバリアフリー化が追いついておらず、理解が不足し、受け入れ体制が不十分であるという意見がある(e.g., Tanaka, Inadomi, Kikuchi, & Ohta, 2004; Tanaka, Inadomi, Kikuchi, & Ohta, 2005)。職場や学校、地域生活、医療や福祉の対人援助分野など、文化や社会的背景、価値観の異なる相手と関わり、相互作用し、共生していく必要性が、今後とも増していくことが考えられるが、多様な存在、多様な価値観を受け容れる態勢が、人々のうちには未だ備わっていないと言える。

そこで本研究は、こうした問題を念頭に置き、異なる価値観の保持者に対する主要な心理的反応として考え

られてきた印象評価の切り下げと、心理的距離の延伸との連関について検討する。

人間は社会的存在である。何らかの集団に所属し、その集団内もしくは集団外の他者と関わり、それらとの相互作用の中で生きている。所属する内集団が、社会的アイデンティティ(social identity: SI)の拠り所となることが多い。内集団ひいきは、外集団との違いを強調・保持し、内集団の価値を高める手段として用いられる(Tajfel, 1982)。一方で、好ましい内集団成員については高く評価するものの、足手まといとなる内集団成員への評価を著しく下げ、同じ内集団成員と見なさないようにすることで心理的に距離を取ろうとする、黒い羊効果もみられる(e.g., Marques & Yzerbyt, 1988; Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988; Pinto, Marques, Abrams, & Levine, 2010)。

ところで、従来、内・外集団逸脱者に対する心理的排除に関連した研究として、彼らが他の内集団成員もしくは外集団成員と比べ、否定的に評価されることを明らかにした研究がある(e.g., Branscombe, Wann, Noel, & Coleman, 1993; Hutchison, Abrams, Gutierrez, & Viki, 2008; Lewis & Sherman, 2010)。これらの研究では、印象評価の切り下げは、相手との心理的距離を遠ざけ、共有する認知的カテゴリーから切り離すことと同様に考えられてきている(e.g., Marques & Yzerbyt, 1988; Marques et al., 1988)。しかし一方では、心理的距離と印象評価は連関しないという研究もある(Chan, Louis, & Hornsey, 2009; Eidelman, Silvia, & Biernat, 2006)。その理由は、ターゲットを心理的に遠ざけると、ターゲットを共有するカテゴリーから外すことに繋がり、これが成功すると、自己や集団にもたらされる脅威は消

失するため、ターゲットに対する評価が低下しないというものである。

このように、内・外集団逸脱者に対する印象評価の切り下げと心理的距離の延伸とが、どのような連関を示すのかは、一貫した結果が得られていない。これは排除研究における1つの課題でもあった(Hutchison et al., 2008)。そもそも、心理的距離と印象評価は、概念的にも測定方法においても異なるものであり、両者は混同されて用いられてきているが、別次元のものとも考えられる。ただ、先行研究に則って考えるなら(e.g., Marques & Yzerbyt, 1988; Marques et al., 1988)、互いに連動する可能性は考えられる。なぜなら、心理的距離とは、相手に対する親密度や好意度、他者との融合の程度に近い概念として考えられてきているからである(天貝, 1996)。心理的距離の近さは、相手との心理的接触の程度を示し(杉本, 2000)、心理的距離を遠ざけることは、相手を疎隔することとも言える(藤井, 2001)。一方で、心理的距離の近い者には、共感しやすいとされる(桑村, 2009)。また、解釈レベル理論(construal-level theory)では、内・外集団成員に対する判断において、一般的に外集団成員との直接的な関わりや情報は少なく、心理的距離も遠いと認知しているため、内集団成員よりも外集団成員を抽象的に解釈し、親密度も減少するとしている(Liberman, Trope, & Stephan, 2007)。天貝(1996)もまた、心理的距離と信頼感との関係を検討し、心理的距離が遠いほど、相手への不信感が高くなるとしている。つまり、心理的距離を遠ざけることにより、相手に対する親密度や好意度も低下することが考えられ、心理的距離と印象評価の負の連関が予測される。

こうした心理的距離の概念を、集団心理の観点から、集団間・集団内葛藤場面における、内・外集団ターゲットへの心理的反応の問題に含めて検討した研究はきわめて少ない(e.g., 大石, 2002)。だが、主に人物画や線分を用いた投影法的手法による心理的距離の測定は(e.g., 天貝, 1996; 藤井, 2001; 草田・山田, 1998; Wapner, 1978)、ターゲットへの心理的接触の程度、近接の程度を、視覚的にも直観的にも把握し得る利点がある。つまり、これまで多くの先行研究でターゲットの評定に用いられてきた印象評定に併せて、心理的距離についても新たに問うことで、内・外集団逸脱者に対する心理的反応に関する、新たな知見が得られる可能性がある。なお、これを検討しようとした Chan et al.(2009)は、内集団ターゲットを、物理的・社会的に集団外へと追放し続けたままの方が、却ってターゲットへの印象評価が高かったという結果から、心理的距離と印象評価は連関しないとしているが、ここでは心理的距離が直接測定されたわけではない。同様に Eidelman et al.(2006)もまた、参加者に

は価値観の範囲を問うのみで、心理的距離に直接焦点を当てて検討したわけではない。さらに、そこで実施された2つの実験は、矛盾した結果をほらみ、必ずしも、彼らの主張にある印象評価と心理的距離が連関しないことを裏付ける内容とはなっていない。

Eidelman et al.(2006)は、逸脱した意見を唱える内集団ターゲットに対して行う心理的排除の効果を操作するために、144mmの線分と印象評価項目を用いた実験を行った。ここでは参加者に、あるテーマに関するターゲット人物の意見を読ませ、線分上に内集団とターゲットが有する価値観の範囲を記させた後、印象評価を行った場合と、その順序を逆にした場合を比較した。すると、実験1では、距離の表明を先に行おうが、印象評価を先に行おうが、内集団ターゲットへの印象評価に差はなかったが、外集団ターゲットでは距離の表明を先に行う方が(特に距離を離すと)印象評価が低くなるという、連関する結果が示された。ただし実験2では、内集団ターゲットに関して、距離を離すと印象評価が高くなるという、実験1とは逆の結果が示された。なお、外集団ターゲットについては、印象評価先行条件と距離表明先行条件で評価に差はなかった。

ほぼ同様の測定方法を用いたにも関わらず、両実験結果は一貫したものとなっていないことについて、Eidelman et al.(2006)は、用いたテーマの種類や、社会状況、内・外集団成員の設定の違いが影響していると考察している。実験1ではイラク戦争への反対をテーマとし、共和党支持者を内集団に、民主党支持者を外集団としたが、実験2では中絶の容認を主なテーマとし、クリスチャンを内集団、無神論者を外集団とした。ただ、実験が行われた当時、米国ではイラク戦争発生前であり、大多数の国民が正義の名のもとに戦争賛成意見を有し、開戦前の高揚感に包まれていた。それゆえ、当時の特異な社会状況の影響もあって、余計に外集団ターゲットを脅威と感じ、実験1のような予測せざる結果になったのかもしれないと推察している(なお、中絶に関しては、法改正のような社会的動きはなかった)。そして、特異な社会状況の影響を受けていないと考えられる実験2の結果で以って、距離と印象評価は連関しないと結論付けている。だが従来の研究では、用いられたテーマの問題が、実験1のように、その社会の中で喫緊の課題であるというようなひっ迫した情勢でなくとも、印象評価と距離は連関すると想定されてきた。また、比較的安定した社会情勢で、戦争問題の賛否をテーマとし、距離と印象評価の測定を含めた検証はなされてきていないため、そのような情勢でも、戦争問題について、実験2のような距離と印象評価が連関しないという結果が得られるかは不明である。さらに実験2では、実験操作の問題がある。ここで

は、中絶問題のほかにも、医師の自殺補助と学校礼拝の賛否に関する問題を併せて問うているが、特に学校礼拝の問題では、内集団の範囲内にターゲットを位置させた者もかなりいた(つまりは、全参加者がターゲットに対し距離を取ったわけではない)。そのため、この、集団内にターゲットを包含した操作が、ターゲットに対する印象評価の上昇に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

このように、心理的距離と印象評価が関連しないという結論には、疑問の余地が残る。だが、一方の心理的距離と印象評価が関連するという見解にもまた、曖昧な点が残る。従来、心理的距離と印象評価は、相互に交換可能な概念として用いられてきたが、両者を同時に含めた検証はほとんどなされてきていない。心理的距離を遠ざけることが、相手に対する親密度や好意度も低下させることに繋がる(e.g., 天貝, 1996)という見解を検証する必要がある。

ところで、これまでの研究では、参加者が抱く、既存の内・外集団成員への印象評価や心理的距離を考慮に入れていない。既存の内・外集団成員へのイメージは個人差が大きいと考えられるため、これを考慮した実験デザインが望まれる。単に刺激文提示後のターゲットへの印象評価や心理的距離のみを問うのではなく、ターゲットの提示によって、どれくらい印象評価や心理的距離が変化したか、事前の内・外集団成員へのイメージからの変動を見る必要があるだろう。

なお、印象評価も心理的距離も、その変動の幅の増減には、認知者が元々抱いている、その集団の成員なら保持していると思われる特性や態度の期待値と、ターゲットが現実保持している特性や態度の現実値とのずれの大きさが、影響すると考えられる。例えば Kunda & Oleson(1995)は、人は、あるカテゴリーに関するステレオタイプから外れた言動や性格特性を示す逸脱者に対し、彼を、そのカテゴリーの非典型の人物(subtype)と見なし、特別視することで認知的に切り離し、元々保持しているステレオタイプや信念、価値観が影響を受けるのを防ごうとすると指摘している。そして、この傾向は既存のステレオタイプや信念を強もつ人ほど、それを破壊された時の衝撃や驚愕が大きくなるため、促進されるとしている。そしてこの見解に沿うと、例えばターゲットの意見が自身のそれと異なる場合、すなわち意見不一致条件では、外集団ターゲットよりも内集団ターゲットに対し、心理的反応が大きくなると考えられる。なぜなら、外集団成員ならば意見が異なっていたとしても意外性は小さく、心理的インパクトも弱い、内集団成員が自身とは異なる意見を保持しているとなると、意外性が大きく、心理的インパクトも強くなると考えられるからである。この期待値と現実値の乖離の大きさが、内集団ターゲットに対する

心理的距離の延伸や、印象評価の切り下げといった心理的反応を促進すると予測される。一方で、ターゲットの意見が自身のそれと同じ場合、すなわち意見一致条件では、内集団ターゲットよりも外集団ターゲットに対し、心理的反応が大きくなると考えられる。なぜなら、内集団成員ならば意見が同じであったとしても意外性は小さく、心理的インパクトも弱い、外集団成員が自身と同じ意見を保持しているとなると、意外性が大きく、心理的インパクトも強くなると考えられるからである。期待値と現実値の乖離の大きさは、外集団ターゲットに対する心理的距離の短縮化や印象評価の上昇を促すだろう。

本研究では、内・外集団ターゲットへの心理的距離の変動を、ターゲットが書いたとするエッセイ(自身の価値観と類似ないしは非類似の内容)を読む前と読んだ後で比較し検討する。心理的距離は、線分を用いた投影法的手法(天貝, 1996)を用いて測定する。そして、エッセイを読む前後の印象評価の変動と心理的距離の変動との関連もみる。

以上の議論より、次のことが予測される。自分とは価値観の異なる内・外集団ターゲットに対しては、何らかの否定的反応を示すことが考えられる。特に、印象評価の切り下げは、ターゲットと心理的距離を取り、認知的に切り離すことに繋がり、両者は関連した動きを示すと予測される。すなわち、認知者とターゲット間の意見不一致条件では、外集団ターゲットより内集団ターゲットに対する期待値と現実値との乖離が大きくなるため、内集団ターゲットへの印象評価の切り下げと心理的距離の延伸が顕著となるだろう(仮説 1)。そして、意見一致条件では、内集団ターゲットより外集団ターゲットに対する期待値と現実値との乖離が大きいため、外集団ターゲットへの印象評価の上昇と心理的距離の短縮化が顕著となるだろう(仮説 2)。

方法

実験参加者

関西の4年制私立大学の女子学生(家政学専攻)46名。平均年齢は18.80歳($SD=1.17$)。海外からの留学生はいなかった。

実験デザイン

ターゲット人物の戦争に関する意見(戦争賛成、戦争反対) × ターゲット人物の所属集団(内集団: 日本人, 外集団: 米国人)の2要因参加者間計画。

実施時期

2010年7月下旬。

手続き

現在抱いている日本人・米国人への印象評価や、感じている心理的距離、戦争への意見などを含んだ事前用

質問紙を講義時間中に配布し、集合形式で実施した。実施にあたっては、“外国人とのコミュニケーションに影響を及ぼす心理的要因についての研究である”と説明した。続いて、エッセイを読ませ、エッセイの著者であるターゲットに関する印象評価や心理的距離などを含んだ事後用質問紙に回答してもらった。エッセイは4条件の中からランダムに配布した。最後にデブリーフィングを行い、実験終了とした。

エッセイのテーマとして戦争を選んだのは、参加者はある程度、戦争の賛否について確立した価値観を有しており、ターゲットの意見に対しても、判断を下しやすいと思われたためである。また、統計数理研究所が実施した2008年の第12次国民性調査(中村・前田・土屋・松本, 2009)で、生まれ変わるとしたら再び日本がよいと回答した割合は77%と非常に高く、生活全体に満足ないしやや満足と回答した割合も78%にのぼっていた。さらに、日本人は西洋人に比べ優れていると回答した割合は37%と、劣っていると回答した割合の8%を大きく離れていた。これらの結果より、日本人としての成員性は、高い集団同一視を有するものとみなし、内集団として日本人を選定した。そして、外集団成員として米国人を選んだのは、文化や外見は日本人のそれとは異なるが、米国は日本との国家間外交の頻度が高く、メディアを通じた認知度も高いので、ある程度の馴染みがあり、外国人としてイメージしやすいと思われたからである。

なお、本実験とは別に、日本人学生の戦争に対する態度や、戦争問題の重要度、日本人・米国人への期待値などを確認するため、女子大学生88名を対象に、別途質問紙調査を実施した(年齢: $M = 18.73$, $SD = .62$)。そこで、米国人で戦争に賛成する人の割合を推測させたところ、平均値は40.2% ($SD = 21.2$)で、日本人で戦争に賛成する人の割合の推測値16.9% ($SD = 21.2$)よりも有意に高かった ($t(87) = 11.40$, $p < .001$)。日本人はほとんどが戦争反対意見であるが、米国人は日本人よりも戦争賛成意見を有し、賛否両論だろうという期待値が示された。また、戦争への賛否について7件法で回答を求めたところ、3以下に回答した者が97.7%であり、ほぼ全員が戦争反対意見であった。そして、戦争問題の重要度についても7件法で回答を求めたところ、5以上と回答した者が70.4%にのぼり、中点4よりも有意に高かった ($t(87) = 9.43$, $p < .001$)。大方が、戦争問題をある程度重要視していた。そのため、テーマへのコミットメントは高いと言える。

事前用質問紙の内容

1. 心理的距離の測定 天貝(1996)の、9.5cmの心理的距離の線分に倣った。左端に自身がいるとし、日本人・米国人・ロシア人がそれぞれ、自身の気持ちからど

れくらいの距離にいるかを問い、1本の線分上に印を付けさせた。ロシア人はダミーの項目として含めた。評定は、天貝(1996)のように0~95mmを5mmずつの20段階で行うのではなく、より微細な距離を把握するため、実測値(mm)を用いて行った。なお、心理的距離を測定する線分に天貝(1996)を用いたのは、自身を起点に、右方向に9.5cmに伸びた1本の線分上に相手との心理的距離を印させるため、回答の自由度が高い中でも、距離の方向性を統制しやすく、距離の実測値も微細に測定しやすいと考えたためである。

2. 外集団成員との接触頻度 操作チェック用項目として、米国人との個人的なつき合いの程度を問うた(3件法)。

3. 参加者の戦争への態度 操作チェック用項目として、参加者の戦争反対の程度を問うた(7件法)。

4. 内集団への集団同一視 操作チェック用項目として、内集団への同一視の程度を測定するため、集団同一視尺度(唐沢, 1991)12項目を用いた ($\alpha = .80$)。7件法。

5. 内集団成員への印象評価 Eidelman et al.(2006)の印象評価項目を参考に、日本人について、「思慮深い」、「善い人だ」、「助けになる」、「賢い」、「優しい」、「温かい」、「総合的に評価して好ましい」、の7項目について9件法で回答を求めた ($\alpha = .86$)。

6. 外集団成員への印象評価 上記の印象評価7項目を用い、米国人についても回答を求めた ($\alpha = .84$)。

事後用質問紙の内容

1. エッセイ ある日本人の女子大学生(もしくは米国人留学生の女子大学生)が書いたとする、戦争についての意見が述べられたエッセイを読ませた。

内容は、戦争反対条件では“他国と戦争することは決して許されないことである。過去の戦争の惨劇を二度と繰り返してはならない。もしテロや弾道ミサイルなどの脅威から、国民の生命や財産を守るのなら、武力行使による解決ではなく、話し合いによる解決を試みるべきである。絶対に人の血が流れるようなことがあってはならない。この姿勢は、ひいては世界平和にも繋がるだろう。”というものであった。

一方、戦争賛成条件では“他国と戦争することは、我が国を守るためには仕方がないことである。テロや弾道ミサイルなどの脅威から、国民の生命や財産を守るためには、敵国に軍事攻撃を仕掛けることも必要なことである。我が国が他国から侵略されるのを防ぎ、独立を守り、国民の平和で安定した生活を維持するためには、もし必要な場合は戦争を行うことも認められると思う。”というものであった。

なお、エッセイの信憑性を高めるため、米国人条件では上記の文章を英訳したものをを用いた。いずれの条件も、

手書きのエッセイをコピーしたものを用い、英文の場合は下部に和訳(活字)を添えた。

2. **ターゲット人物の戦争賛成度** 操作チェック用項目として、ターゲット人物の戦争への賛成度を問うた(7件法)。

3. **ターゲット人物への心理的距離の測定** 事前用質問紙で使用の、9.5cmの心理的距離の線分を再度用いた。ただしここでは、自身からターゲット人物がどれくらいの距離にいるかを線分上に印させた。評定は実測値を用いた。

4. **ターゲット人物への印象評価** 事前用質問紙で使用の、内集団(または外集団)成員への印象評価7項目を再度用い、ターゲット人物について問うた($\alpha = .91$)。9件法。

5. **ターゲット人物実在の信憑性** エッセイの妥当性確認用として、ターゲット人物が実在すると参加者が信じたかどうかをチェックするため、“今後、同じような実験を行う際、このエッセイの筆者と会話してもらいたいと考えていますが、もしあなたがその時に参加者であったなら、会話を希望しますか?”の質問項目を最後に設けた。これについて“希望する・希望しない”を選択させ、後者の場合はその理由も書かせた。これを内容分析し、実在を疑った参加者がいるかどうかを調べた。

従属変数

1. **心理的距離差** 事後用質問紙の心理的距離の実測値と、事前用質問紙の心理的距離の実測値との差を、心理的距離差とした。この心理的距離差は、得点が大きくなると、事前評定よりもエッセイを読んだ後の方が、ターゲットへの心理的距離が大きくなることを意味する。事前用質問紙では、日本人・米国人というカテゴリー一般についての評定を求めた。また、事後用質問紙ではターゲットが各カテゴリーを代表する者であるとして評定させた。分布の歪みを矯正するため、値は対数変換したものを用いた。

2. **印象評価差** 事後用質問紙の印象評価得点の平均値と、事前用質問紙の印象評価得点の平均値との差を、印象評価差とした。この印象評価差は、得点が大きくなると、事前評定よりもエッセイを読んだ後の方が、ターゲットへの印象がよくなることを意味する。また、評価対象については心理的距離差と同様、事前用・事後用質問紙とも、日本人・米国人という国籍への言及を行った。

結果

操作チェック

1. **外集団成員との接触頻度** 参加者のうち、米国人との個人的な接触がまったくないと回答した人の割合は73.9%、少しはあるが26.1%、かなりあるが0%であった。

これより、ほとんどが接触がないと言える。

2. **参加者の戦争への態度** 参加者の戦争反対度は($M = 1.13, SD = .54$)、中点4よりも有意に低かった($t(45) = 35.91, p < .001$)。参加者は、日本が戦争を行うことに対し、強く反対する傾向にあった。

3. **集団同一視の程度** 参加者の集団同一視は($M = 4.92, SD = .78$)、中点4よりも有意に高かった($t(45) = 7.98, p < .001$)。参加者は日本人として、ある程度高い集団同一視を有していた。

4. **エッセイの妥当性** エッセイの妥当性を検討するため、ターゲットの戦争賛成度の得点を従属変数とし、ターゲットの戦争に関する意見(賛成、反対)と集団成員性(内集団、外集団)を独立変数とした、2要因分散分析を実施した。その結果、意見の主効果のみ有意であった($F(1, 42) = 87.77, p < .01$)。成員性の違いに関わらず、賛成条件($M = 4.99, SD = .29$)は、反対条件($M = 1.37, SD = .25$)よりも、ターゲットが戦争に賛成している程度が高いとみなされていた。また、信憑性の項目でも、ターゲットの実在を疑った内容の記述はみられなかった。

心理的距離と印象評価の連関

心理的距離の変動と印象評価の変動の連関性を検討するため、心理的距離差と印象評価差との相関分析を実施した。結果、両者は有意な負の相関を示し($r = -.49, p < .01$)、距離差がひらくほど印象評価の落差が大きくなることが示された。

心理的距離の変動

成員性(内集団、外集団)とターゲットの戦争に関する意見(賛成、反対)を要因とし、心理的距離差を従属変数とする2要因分散分析を実施した。

その結果、意見と($F(1, 42) = 14.95, p < .001$)、成員性の主効果($F(1, 42) = 7.85, p < .01$)が見出された。だが交互作用は有意でなかった($F(1, 42) = 2.09, ns$)。日常の好悪をコントロールし、2回目の心理的距離に注目した結果、内・外集団成員とも、意見一致条件よりも意見不一致条件で心理的に遠ざけていた(Figure 1)。また、意見一致・不一致条件ともに、内集団成員よりも外集団成員の方を心理的に近づけていた。傾向として、特に意見一致条件では、外集団成員をより心理的に近づけていた。

印象評価の変動

成員性(内集団、外集団)とターゲットの意見(賛成、反対)を要因とし、印象評価差を従属変数とする2要因分散分析を実施した。

その結果、意見と($F(1, 42) = 10.61, p < .01$)、成員性の主効果($F(1, 42) = 7.37, p < .05$)が見出された。だが、交互作用は有意でなかった($F(1, 42) = 1.90, ns$)。内・外集団成員とも、戦争反対条件よりも戦争賛成条件で印

象評価の落差が大きかった(Figure 2)。また、意見一致・不一致条件ともに、内集団成員への落差が大きかった。意見一致条件では、外集団成員への印象評価の上昇が大きい傾向にあった。

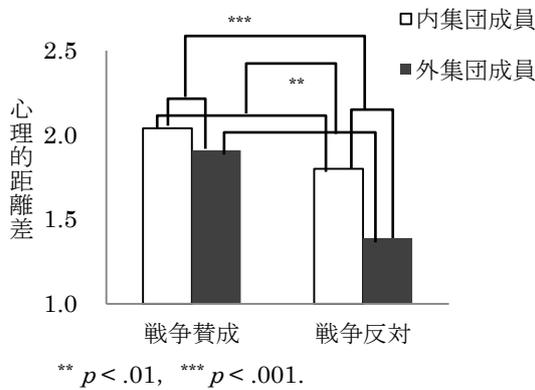


Figure 1 評価対象人物への心理的距離の変動

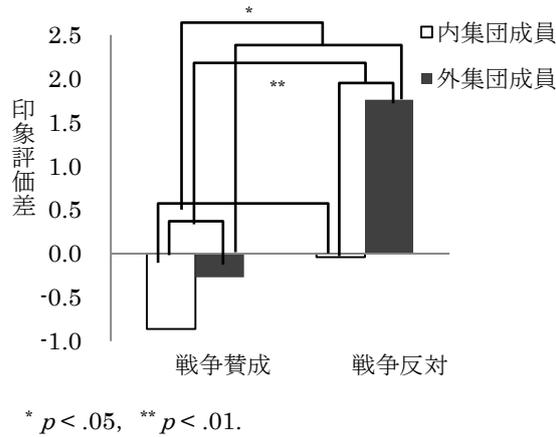


Figure 2 評価対象人物への印象評価の変動

考察

相関分析の結果から、心理的距離と印象評価の変動が、互いに連関することが示された。また、心理的距離の変動と印象評価の変動では、いずれも有意な交互作用がみられなかったが、全体的に、意見一致条件は意見不一致条件よりも、心理的距離が近くなり、印象評価も上昇していた。特に、外集団ターゲットに対する心理的距離の短縮化と、好感度の増加が大きい傾向にあった。仮説1は不支持であったが、仮説2は一部支持されたとと言える。

戦争反対意見のターゲットは、内・外集団の別なく、好意的に評価されていた。ただ、どちらかと言えば、外集

団ターゲットへの評価が高い傾向にあった。これについて、日本人ターゲットが戦争反対意見を唱えても、期待値と現実値とのずれは小さく、インパクトも弱いいため、ターゲットへの評価の上昇や、距離の短縮化が顕著にならなかったと考えられる。だが、米国人ターゲットが戦争反対意見を唱えた場合、外集団成員の一人が自分達と同一意見を保持していたことのインパクトが強く、評価の上昇や距離の短縮化に繋がりがやすかったのではないかと考えられる。

さらに、意見一致・不一致条件とも、外集団ターゲットよりも内集団ターゲットを非好意的に評価していた。戦争反対意見の意見一致条件では、上記のように、内集団ターゲットの意外性が小さいため、外集団ターゲットよりも低い評価であったと考えられるが、戦争賛成意見の意見不一致条件では、日本人ターゲットに対する期待値と現実値のずれが大きいため、米国人ターゲットよりも非好意的な評価を受けやすかったとも考えられる。

また、本研究の結果は、心理的距離と印象評価の変動の方向性が、互いに類似の傾向にあることを示唆していた。これは、心理的距離の延伸と印象評価の切り下げが、類似の動きをする認知的方略であるという(e.g., 天貝, 1996; Marques & Yzerbyt, 1988; Marques et al., 1988)、従来の多数の知見にも沿う結果である。つまり、相手の印象評価を切り下げることは、自分や多数派の存するポジションやカテゴリーから相手を落とすことにより、それによって心理的に距離を離すことにもなる。心理的距離を離すこともまた、相手との心理的な近接度を低める効果をもち、相手に対する好意度を低下させることである。そして心理的に彼方に追いやること、相手との心理的な関わり合いをなくそうとする、言わば「見切り」の行為(藤井, 2001)とも言える。そうして心理的脅威を低減させ、SIを守り、自身や集団の安定化を図るのである。

ただ、本研究では、心理的距離を取った後に印象評価を行うという順で実施したため、心理的距離を取るという行為によって、自分は相手を心理的に疎隔しているという態度の認知が起り、その態度の一貫性を保とうとして、続く印象評価を低下させた可能性も否定できない。こうした自己知覚(Bem, 1972)の影響も考えられるので、今後の研究では、回答行動における態度の一貫性を断ち切るような実験状況を設定することも考えられる。そうすれば、心理的距離と印象評価は連動しない可能性もある。また、印象評価と心理的距離の延伸の連関は確認できたが、その因果関係は未確認である。果たして、印象評価が低下したから心理的距離を遠ざけたのか、もしくはその逆かは不明である。印象評価と心理的距離の順序効果を考慮した、さらなる検証が望まれる。

そして、本研究は、1つの講義時間内に集合形式で実施したため、周囲の学生の存在や、事前用質問紙と事後用質問紙の実施間隔がきわめて短かったことなどから、参加者が落ち着いて熟慮しながら回答する、心理的余裕を削いでしまったとも考えられる。実験手続き上の問題が、ターゲットの印象評定にかかる回答行動に影響を及ぼしてしまった可能性も否定できないため、今後、実験環境を統制し、参加者について個別に実施して見る必要がある。

ところで、従来、内・外集団ターゲットへの評価の差異については、SIの維持・高揚という動機的側面や、個人の認知的側面(スキーマの複雑性)から説明がなされてきた。それによると、例えば、集団同一視の高い成員は、肯定的なSIを保持するため、規範的な内集団成員を外集団成員よりも高く評価し、反規範的な内集団成員を外集団成員よりも低く評価するとされる(e.g., 大石・吉田, 2001)。一方で、内・外集団成員に関するスキーマの複雑性の違いに着目し、得られる情報量の多い内集団成員よりも、情報量の少ない外集団成員をより極端に評価しがちであるという、認知の複雑性 - 極端性仮説(Complexity-Extremity hypothesis)も提案されている(e.g., Linville, 1982; Linville & Jones, 1980)。それによると、認知者は、ターゲットに関するポジティブな情報を受けた場合、内集団成員よりも外集団成員の方をより好意的に評価するが、ネガティブな情報を受けた場合、内集団成員よりも外集団成員をより非好意的に評価するとされる。さらに、Branscombe et al.(1993)は、集団同一視が低い成員は、外集団ターゲットへの評価を極端に行うが、同一視の高い成員は、内集団ターゲットへの評価を極端に行うとしている。

しかし、本研究の結果は、こうした先行研究の知見を支持しない傾向にあった。参加者の集団同一視は、ある程度高いものであったが、規範的意見と言える戦争反対条件では外集団ターゲットを、反規範的意見と言える戦争賛成条件では内集団ターゲットを、有意差はみられないものの、極端に評価する傾向にあった。本研究の結果は、上記のSIに関する動機的側面に基づいた知見や、スキーマの複雑性に基づいた知見とは合致せず、こうした従来の知見がいかなる状況においても、普遍的に適用可能な説ではない可能性があることを示唆している。

そして、こうした結果には、本研究で扱ったエッセイのテーマの質が影響している可能性も考えられる。先行研究は、価値観を問うテーマの種類を特に考慮せず、主に当時の社会的問題や、ジェンダーや人種を扱った内容が多くを占めてきており、戦争への意識についてはほとんど問われてきていない。しかし、自身や内集団にとってのテーマの重要性が、ターゲットへの反応方法や動

機づけを左右するという見解もある(Frings, Abrams, Randsley de Moura, & Marques, 2010)。本研究の参加者にとって、戦争問題は重要度の高い、深刻な問題であったのかもしれない。そして、先行研究で用いられたテーマは、深刻度の低い問題であったのかもしれない。戦争反対意見が是とされ、戦争賛成意見を唱えることが許されないような風潮の日本にあって、あえて戦争賛成を主張する内集団ターゲットは、かなり特殊な、脅威すら感じさせる存在であり、そのインパクトの過大さが、意見不一致条件での、内集団ターゲットへの反応を増進させたとも考えられる。また、戦争反対を主張する内集団ターゲットについては、至極当然のことを述べているに過ぎないという認知により、印象が薄く、内集団ターゲットへの反応の増進に繋がらなかったと考えられる。今後、本研究で扱ったエッセイのテーマ以外でも、同様の傾向がみられるかについて、検証する必要がある。

さらに、外集団として、米国以外の国を対象とした場合にも、同様の結果が得られるのか検討する必要がある。諸外国に対する、国民の既存の親近感は異なるため(内閣府大臣官房政府広報室, 2010)、例えば歴史上交戦国であったか、同盟国であったか、もしくは戦争という国家間の利害が絡んだことのない国か、また現在の友好関係の程度や地理的關係なども考慮し、比較・検討していく必要がある。

なお、本研究では、参加者間計画で実施したことにより、個人内の比較ではない、より普遍的・一般的な結果が得られたと言える。ただ、大石・吉田(2001)は、従来の内・外集団認知の研究が、参加者における内・外集団の比較の文脈を抜きにした参加者間計画でばかり行われていると指摘している。特に、黒い羊効果惹起の要因となるSIへの脅威は、内・外集団の比較の文脈が存在する場合に生じるとされる(大石・吉田, 2001)。今後、参加者内計画で、比較の文脈を導入して検証することも課題である。

本研究では、学生のほとんどが戦争に強く反対しているという結果であり、また多くの日本人もそのように考えていると見なしていた。そして、戦争に賛成した日本人ターゲットを低く評価し、心理的距離を遠ざけ、敬遠しようとする様子が見えなかった。だが、これは女性を対象にしたからこその結果とも言えるかもしれない。2009年に内閣府大臣官房政府広報室が実施した、自衛隊・防衛問題に関する世論調査でも、女性は男性よりも防衛問題についての関心が低いとされている。一方で、男性は女性よりも、自分とは異なる存在としての他者の感情を体験し、理解しようとする共感性が低いことが指摘されている(角田, 1994)。男性を対象に先の実験を実施したなら、結果は異なる様相を呈するかもしれない。本研究の結果を一般

化していくには、男性も対象に実施し、男女間で、本研究で得られた結果に差がみられるか、比較・検討していく必要がある。さらには、大学生だけでなく、幅広い年代を対象に実施し、結果を比較していくことが望まれる。

引用文献

- 天貝由美子 (1996). 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, **29**, 130-134.
- Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, **4**, 1-62.
- Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J. G., & Coleman, J. (1993). In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 381-388.
- Chan, M. K. H., Louis, W. R., & Hornsey, M. J. (2009). The effects of exclusion and reintegration on the evaluation of deviant opinion holders. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **35**, 1619-1631.
- Eideman, S., Silvia, P. J., & Biernat, M. (2006). Responding to deviance: Target exclusion and differential devaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 1153-1164.
- Frings, D., Abrams, D., Randsley de Moura, G., & Marques, J. (2010). The effects of cost, normative support, and issue importance on motivation to persuade in-group deviants. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, **14**, 80-91.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, **49**, 146-155.
- Hutchison, P., Abrams, D., Gutierrez, R., & Viki, G. T. (2008). Getting rid of the bad ones: The relationship between group identification, deviant derogation, and identity maintenance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 874-881.
- 角田 豊 (1994). 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 唐沢 穰 (1991). 集団同一視尺度 吉田富二雄 (編) 心理測定尺度集II 東京: サイエンス社 pp. 221-225.
- Kunda, Z., & Oleson, K. C. (1995). Maintaining stereotypes in the face of disconfirmation: Constructing grounds for subtyping deviants. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 565-579.
- 草田寿子・山田裕紀子 (1998). 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 IV—家族図式に表現された高校生の家族関係パターンと家族コミュニケーションとの関連— カウンセリング研究, **31**, 10-18.
- 桑村幸恵 (2009). 共感的羞恥と心理的距離 パーソナリティ研究, **17**, 311-313.
- Lewis, A. C., & Sherman, S. J. (2010). Perceived entitativity and the black-sheep effect: When will we denigrate negative ingroup members? *Journal of Social Psychology*, **150**, 211-225.
- Lieberman, N., Trope, Y., & Stephan, E. (2007). Psychological distance. In A. W. Kruglanski & E. T. Higgins (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles* 2nd ed. New York: Guilford Press. pp.353-383.
- Linville, P. W. (1982). The complexity-extremity effect and age-based stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 193-211.
- Linville, P. W., & Jones, E. E. (1980). Polarized appraisals of out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 689-703.
- Marques, J. M., & Yzerbyt, V. Y. (1988). The black sheep effect: Judgmental extremity towards in-group members in inter- and intra-group situations. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 287-292.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. (1988). The black sheep effect: Extremity of judgments towards ingroup members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 1-16.
- 内閣府 (2011). 障害者白書—平成 23 年版— 内閣府 <<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h23haku-sho/zenbun/index.html>> (2011 年 12 月 1 日)
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2009). 自衛隊・防衛問題に関する世論調査 <<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-bouei/index.html>> (2011 年 3 月 8 日)
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2010). 外交に関する世論調査 <<http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-gaiko/index.html>> (2011 年 7 月 5 日)
- 中村 隆・前田忠彦・土屋隆裕・松本 渉 (2009). 国民性の研究 第 12 次全国調査—2008 年全国調査— 統計数理研究所研究レポート No.99.
- 大石千歳 (2002). 友人関係意識、集団の構造、及び他者との心理的距離が内集団成員及び内外集団の評価に及ぼす影響 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 664-665.
- 大石千歳・吉田富二雄 (2001). 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響—社会的アイデンティティ理論の観点から— 心理学研究, **71**, 445-453.
- Pinto, I. R., Marques, J. M., Abrams, D., & Levine, J. M. (2010). Membership status and subjective group dynamics: Who triggers the black sheep effect? *Journal of Personality and Social Psychology*, **99**, 107-119.
- 杉本浩利 (2000). 対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす影響についての研究—個人空間の投影法的測定を通して— 九州大学心理学研究, **1**, 67-78.
- Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, **33**, 1-39.
- Tanaka, G., Inadomi, H., Kikuchi, Y., & Ohta, Y. (2004). Evaluating stigma against mental disorder and related factors. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **58**, 558-566.
- Tanaka, G., Inadomi, H., Kikuchi, Y., & Ohta, Y. (2005). Evaluating community attitudes to people with schizophrenia and mental disorders using a case vignette method. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **59**, 96-101.
- Wapner, S. (1978). Some critical person-environment transitions. *Hiroshima Forum for Psychology*, **5**, 3-20.

註

- 1) 本論文を執筆するにあたり、大阪大学大学院人間科学研究科の大坊郁夫先生に貴重なご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

The linkage between psychological distance and evaluation of in- or out-group targets who hold different values

Mami MUTO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Naoki KUGIHARA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purposes of this study were to examine whether (1) extension of psychological distance from in- or out-group targets who hold different values would correlate with an increase in negative impression of them, (2) strength of this correlation would increase when the difference between actual value and expectancy value which people have about targets became great. The experimental design was a 2 (anti-war vs. pro-war opinion presentations) \times 2 (Japanese in-group presenter vs. American out-group presenter) between-participants factorial. The results were as follows: (1) in anti-war condition participants shorten psychological distance from both in- and out-group targets and raise evaluation about them, (2) both in anti- and pro-war condition participants increase psychological distance from in-group targets and devalue them more than out-group targets, (3) psychological distance to targets covariates with their evaluation. The implications of these results are discussed.

Keywords: psychological distance, evaluation, actual value, expectancy value, in- or out-group.